

父から学んだ心の剣道

今青少年に伝える



藤野 圭江

剣道家の末娘で生まれ、5、6歳で剣道を始めました。剣道と申しましても一番の稽古は広い道場の雑巾がけから始まります。薄い水の張ったアルミバケツの中の水は冷たく一番つらい稽古でした。練習は基本、基本の毎日、一呼吸で行う切り返し、掛かり稽古のみ、技は教えてもらえません。この基本が後々絶対的な教えであるなどその時は苦しいだけで知るよしもありませんでした。24歳で結婚、暫く剣道から遠ざかっておりましたが、40歳を過ぎて大義塾世田谷支部を創り現在に至っております。父から学んだ他人への思いやり、感謝の気持ち、そして基本の大切さ、その全てが今日まで育てた生徒たちに引き継がれています。

世田谷支部を創って30年以上になりましたが、私が幼かった頃の時代と今の子供たちとは生活環境が違うのでしょうか。入門した始めは相手の目を見て話すことが出来ず、「ハイ」の言葉も言えない子。わんぱくで言うことを聞かない子、弱虫で自分に自信のない子、様々ですが、手の掛かる子程教え

がいがあります。この子たちをどう変えていくか、変えられるか自分の指導力に賭けてみます。数カ月後見事「圭江マジック」に掛かり別人のようになります。

以前、ある小学校の校長先生より、日本の文化である剣道を授業の一環として取り入れ、生徒たちに経験させたいと依頼が来しました。反抗期である5年生1クラス40名、3クラスの生徒たちです。私は喜んでお引き受け致しました。初めて竹刀を持つ生徒たち、ヨシ！最後にどれだけの生徒が「楽しかった」と言ってくれるか、また私は自分の指導力に賭けます。生徒たちは、「何で俺たち剣道しなくちゃいけないんだよ」と不貞腐れた態度で体育館に入ってきた



「圭江マジック」で子供たちを変えていく

た。始めに剣道の歴史、礼法、最後に竹刀を持たせ基本に入る。常に「何々君いいね、いいね、目が輝いて来たよ、皆の一生懸命が先生の心に伝わって来るよ」と声をかけ続けると、次第に皆の大きな声が体育館中に響き渡るようになりました。最後に剣道経験のある担任の先生の掛かり稽古を受け、父から譲り受けた得意とする引き立て稽古では私と先生の心が一体化し、見事にやり遂げました。生徒たちは大喜び、大拍手でした。「今日の剣道楽しかった人？」と聞くと、なんと全クラス全員が大きな声で手を上げてくれ、「有難うございました」と、きちんと立礼をして帰りました。校長先生、教頭先生、PTA会長皆驚かれ、「先週の華道の授業は真面目にやらず全く駄目、今日は目から鱗が落ちました。普段の授業にもいらしていただけないでしょうか」と言っていたいただきました。また後日、生徒たちからは感謝の手紙が送られて来ました。

道場に3、4歳から通い始めた生徒が30歳を迎えようとしています。今でもほとんどの生徒が剣道を続けています。基本稽古のお蔭で審査では美しい気位のある剣道を見せてくれています。その姿は誇らしく、見ていて胸が熱くなり

ます。生徒たちの幼かった頃が蘇って来ます。反抗期時期では一緒に悩み、一緒に解決し、一緒に成長して来ました。それに加えて、最近嬉しいことがありました。約2年間、登校拒否を起こし学校に行けなかった6年生が剣道を通して学校に行けるようになりました。この子を学校に行かせるのは私の使命と考え、彼の指導に力を注ぎました。「先生、学校に行ってみるよ、もう大丈夫だから」と、再び学校にも通い、修学旅行にも行きました。それだけでなく、道場の合宿も参加、世田谷区少年剣道大会では大将を務め3位に入賞しました。春には中学生になります。剣道の教えは勝負だけではなく、生きるための大切な礎と考え、生徒たちと共に学び続けます。

昭和18年生まれ。大義塾初代塾長 中村藤吉の末娘。現在大義塾世田谷支部長を務める。剣道教士七段。

ずいひつ

